村井先生の佐伯湾漂着説とリーフデ号漂流実験

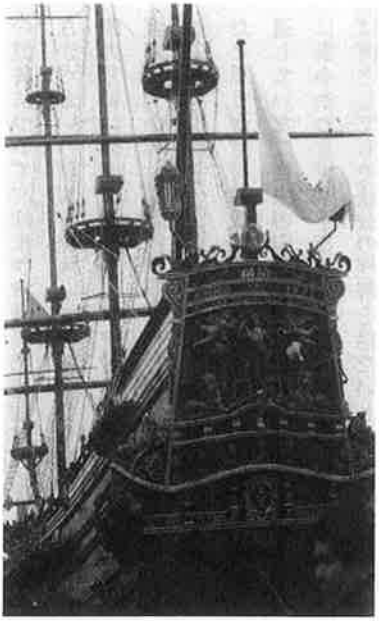
さとうたくみ
（会員　佐伯市池船町）

オランダ船豊後漂着

一六〇〇年といえば、天下分け目の関ヶ原合戦の起こった年である。その年の三月一七日（旧暦）、豊後シャチバイに一隻の西洋帆船が漂着した。

生存していた乗組員は二四名、そのうち歩行のできる者はわずか五・六名であった。やがて数多の小舟がこぎ寄せて来て、人々は甲板に上り貨物をことごとく盗み去ったが、乗組員に危害は加えなかった。こうして船はこの地に投錨したのである。

この地に駐在していた耶蘇会のパードレは臼杵城主大田一吉にこのことを知らせ、船が災禍に襲われることのないように応援を求めた。またパードレ二人が数隻の舟を率いて救援に向かったが、その船がポルトガルと敵対するオランダ人のものだとわかったので引き返してしまった。



翌日、臼杵城主太田一吉は兵卒を船上に遣わして盗まれた商品などを調査させた。この日、病床にあった乗組員三人が死亡している。

一方、長崎にいたポルトガル人はオランダ船のことを聞いて長崎奉行寺沢に書面を送り、その船がポルトガル人をはじめキリスト教徒の敵であるルーテル派の海賊のものであると忠告した。寺沢はこの報告を受け、また臼杵城主太田一吉より数回の書面を受け取っていたので、

大坂城の家康のもとに急使を派遣する一方、豊後には漂着船と乗員の身柄を拘束するよう通達した。

二・三日後、オランダ船リーフデ号は臼杵港に曳航され、家康による処分が決定するあいだ同所に滞在することになった。その間、臼杵城主の厚意を得て船長と病員（病人）の上陸が許可され、住居が宛てがわれ食糧も給与された。この間、病員三人が死亡している。

臼杵に滞在して五・六日後、長崎から耶蘇会のポルトガル人と通訳が到着、彼らはオランダ船が通商に来たのではなく海賊であると報じ、裁判官や世人を扇動してオランダ人に反対した。このため船員二人が裏切って彼らにつき、船中の商品を売りさばき、あるいは彼らの手中にしてしまった。

到着後九日目、大坂城の家康から使者が到来して、航海長ウィリアム・アダムスと船員一人は船長ら病員を残して大坂城に送致された。アダムスは家康に引見され尋問を受けること再三に及び、四一日目に拘束を解かれ、堺に回漕していたリーフデ号と船長はじめ船員らと再会することができた。

堺の港に碇泊すること三〇日、リーフデ号は家康の居住する関東江戸へ回漕され、船員らは生活費を給与され日本に居住することになった。後にアダムスは家康の外交顧問となり相模国三浦郡に領地を賜わったので三浦按針と呼ばれるようになった。

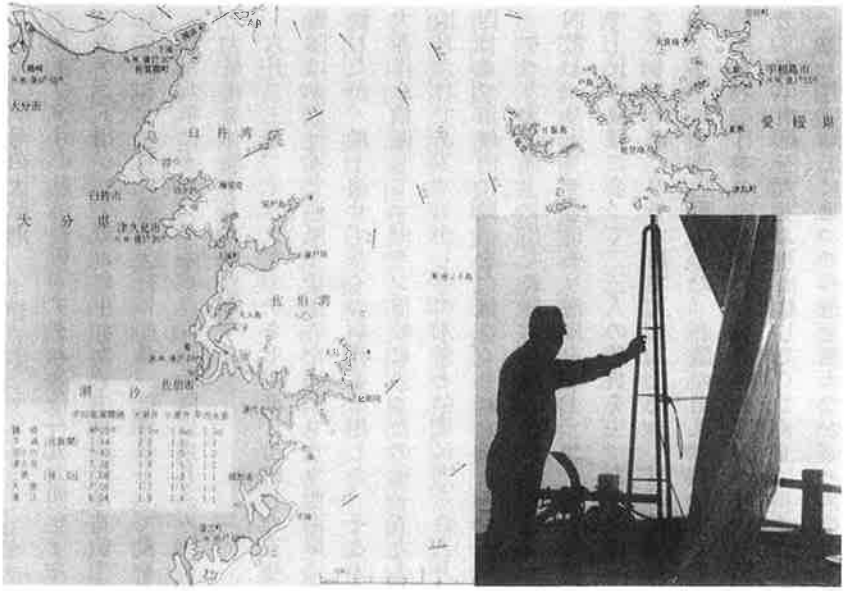
（アダムスの書簡及び亜細亜誌より）

佐伯湾漂着説

私が村井先生に出会ったのは、昭和六二年九月三日の常任評議委員会であった。この日は特別に会員村井強氏と宮下良明氏が顔を見せていた。

村井氏は佐伯史談一四一号に「オランダ船リーフデ号の漂着について、リーフデ号の漂着地は佐伯ではなかったか」という新説を発表している。さらに一四八号と一四九号に「オランダ船リーフデ号の臼杵湾内佐志生海岸漂着について」詳細な論説をまとめ発表の途次にあった。

二人を招聘したのは前事務局長の清田先生の配慮であったと思うが、村井氏が新説を発表してから既に二年が経過していた。従来の定説を覆す重大な研究発表であったにもかかわらず、手ごたえのある反応が得られず、今回は何としても史談会の理解を得たいと訴えに来られたの



実験船長久丸と増永船長

であろう。

確かに、私自身も村井先生の記事をよく読んではいなかった。すでに臼杵湾漂着説が先行していて、いまさらリーフデ号が何処に漂着しようが豊後に漂着した事実、歴史の大系は変わらないと思ったからである。しかし、今ここで恐縮しながらも訴えようとしている初老の紳士、その人柄に興味を覚えたので、もう一度、記事を読み直してみた。

村井先生はアダムスの書簡やディオゴ・コウト「亜細亜誌」の記録からリーフデ号漂着の経緯を詳細かつ正確に考証し、また臼杵湾佐志生説がいかに安易に成立し定着してしまったかを指摘し、佐伯湾指夫説を起こすにいたったのである。

村井先生の論説を熟読すれば「佐伯湾指夫説」に勝算のあることは誰が見ても明らかである。しかし学会は「臼杵湾佐志生説」を定説と受け入れ、臼杵は黒島に「三浦按針上陸記念碑」を建設し、「按針祭」を恒例の行事とするなど既成の事実を積み重ねている。これらを打破して新説を容認させるのは容易ではない。とりあえず二人を囲んで話を聞く会からはじめようと提案した。

リーフデ号の大航海

リーフデ号の航海長W・アダムスは一五六四年イギリスのケント州ジリンガムに生れた。少年時代は造船工として働き、のちに貿易会社に船長、航海長として勤務、一五九八年にオランダの東洋探険船隊に乗り込み、苦難の大航海を体験することになった。

六月二三日、オランダのテキゼル港を出帆した五隻の艦隊は赤道付近で逆風と猛雨のためアフリカ西海岸に避難したが、風土適せず多くの病死者を出した。そこから大西洋を横断してマゼラン海峡に入ったのは一五九九年四月六日である。しかし冬の氷雪と強風に遮られ八月二四日まで海峡内に碇泊を余儀なくされた。

やっと太平洋上に出た艦隊は再度の暴風雨に遭遇して四散し、リーフデ号はチリ海岸を北上、サンタマリア岬で土民の襲撃に会って二三人の船員を失った。旗艦ホープ号もまた近くのモカ島で二七人を失って、両船はサンタマリア島で偶然再会した。評議の結果、毛織物の需要が見込める日本へ向かうことを決定し、一一月一七日にチリ海岸南緯三六度より出航した。

数ヵ月は順風に乗って赤道を越えたが、一六〇〇年二月二三日、北緯二八度付近に達したとき未曾有の暴風雨に遭遇した。リーフデ号はついに旗艦を見失ったが日本に進路を向け、北緯三〇度付近で日本の岬を探したが見当たらず、四月一九日、三二度半に至ってやっと日本の陸影を発見することができたのである。

サンタマリア島を出航して四ヵ月二二日、オランダを出発して約一年一〇ヵ月を費やした飢餓の航海だった。一一〇名の船員は二四名となり、多くは病に伏せ、自ら歩ける者は五・六名という惨状であった。翌日かろうじて豊後の地に達し一リーグの沖合いに碇を下ろしたのである。

（アダムスの書簡より）

リーフデ号実行委員会の発足

私は当時、若いサークル仲間と佐伯城復元模型の制作に関わったり、日豊ロマンと称して延岡から佐伯までノロシ通信を試みるなどの活動に参加していたが、リーフデ号佐伯湾漂着説について相談を持ちかけた。

佐伯湾には唐船鼻・唐船バエ・唐人バエ等の地名は残っているが、いつの時代に付いたものか、あるいは明船だっ

たのか南蛮船だったのか、確証につながる史料は残されていない。状況証拠は揃っているのに物証が得られない状況である。そこで最期の手段として、リーフデ号が日本の陸影を発見した地点から船を流し、何処に漂着するかを検証することで決する以外にはない。という結論に達した。

この計画は平成元年々末頃から具体化し、平成二年二月に実行委員会を発足、汐月三代吉氏を実行委員長に、村井強氏・宮下良明氏などの佐伯史談会員、甲斐伸君を副会長に、清松幸生君・平野憲司君ら日豊ロマンの面々、それに西上浦地区の共賛を得、指夫地区の全面的な協力を仰いで、四月一一日（旧歴三月一六日、リーフデ号が日本の陸影を発見した日）に決行されることになった。

リーフデ号漂流実験と成果

四月一一日、第一回目の実験は荒天のために二時間で中断、結果は「佐伯史談一五四号」に掲載されている。五月九日、第二回目の実験は風ぎのため北上せず終了、結果は「佐伯史談一五五号」に掲載している。

二度の実験ではいずれも佐伯湾に漂着することはでき

リーフデ号実行委員会　H.2.4月19日

なかったが、その成果は大きかった。先ず佐伯市民がこの実験に関心を示し、我々に歴史のロマンを託したことである。また報道は県内外に及び、村井先生の「佐伯湾漂着説」の存在をアピールできたことである。これによって良識ある学者は「村井説」を無視してリーフデ号の漂着地を語れなくなったわけである。

一部では漂流実験は失敗に終わったと受け取る向きもあるが、村井先生は実験結果から「佐伯説」を補強するデーターが得られたと評価され、佐伯史談一六一～一六二号に「リーフデ号佐伯湾漂着説・補遺」を発表された。リーフデ号航跡検証実験船・これが先生の遺稿となり平成六年九月九日他界された。

今、リーフデ号関連記事を読み返して胸の熱くなる思いである。郷土史の研究に真摯に取り組んだ村井先生、実行に導いてくれた仲間たち、基金を募ってくれた西上浦地区の方々に深謝申し上げるとともに、村井先生の「佐伯湾漂着説」を風化させないよう語り継いでいくのが我々の責務であると思っている。

故 村井 強先生

村井 強先生の略歴

大正５年４月１５日生　大野郡野津町出身。
昭和２７年　佐伯市葛港にて薬種商を営む。
昭和３９年　佐伯史談会・鶴岡郷土史研究会
　　発行「朝鮮日々記」
昭和４０年　佐伯史談７号「常盤井路記録」
昭和４１年　佐伯史談１９号「太田一吉の事跡」
昭和６１年　佐伯史談１４１号「オランダ船
　　リーフデ号の漂着について」
昭和６３年　佐伯史談１４８号・１４９号
　　「オランダ船リーフデ号の臼杵湾
　　内佐志生海岸漂着説について」
平成２年　オランダ船リーフデ号漂着実験
平成４年　佐伯史談１６１号
　　「リーフデ号佐伯湾漂着説補遺１」
平成５年　佐伯史談１６２号
　　「リーフデ号佐伯湾漂着説補遺２」
平成６年９月９日没　７８才